



周恩来选集

(1926年——1949年)

周恩来選集

(1926年——1949年)

外文出版社
北 京

周恩来選集 (1926年~1949年)

1981年初版発行

出版者	外文出版社 (北京阜成門外百万莊)
発行者	中国国際書店 (北京 399 P.O.BOX)
印刷所	外文印刷工場

編号: (日) 3050-2842

3-J-1561DA

00440

出版にあたって

周恩来同志は、偉大なマルクス主義者、プロレタリア革命家であり、中国共産党と中華人民共和国のすぐれた指導者であった。中国の民主主義革命、社会主義革命および社会主義建設の長期にわたる過程で、周恩来同志は党建設、政權建設、軍隊建設をはじめ、敵占領区における活動と根據地における活動、統一戦線活動と外交活動、経済活動と文化活動など多くの面で、マルクス主義の普遍的真理を運用して中国の實際問題を解決し、毛沢東思想の形成と発展にすぐれた貢献をした。

マルクス・レーニン主義、毛沢東思想と中国革命の歴史を学習、研究する広範な読者の要求にこたえて、われわれはこの「周恩来選集」を編集、出版することにした。本選集は上下二巻に分かれ、上巻には中華人民共和国成立までの著作、下巻には中華人民共和国成立後の著作がおさめられる。

周恩来同志は、数多くの論文、文書、書簡、電報を書き、多くの重要演説をおこなったが、苦難にみちた戦時の諸条件のもとで、散逸してしまった文献も少なくない。今回、われわれは周恩来同志の著作と演説の記録をできるだけ収集した。本選集におさめたのは、もっとも重要と思われるものの一部にすぎないが、このなかにも未発表のものが少なくない。

本選集に収録した著作のうち、周恩来同志の在世中に公表されたものや、自筆の原稿が

あるものはすべて手を加えないこととし、字句と史実にいくらかの修正と訂正をほどこすにとどめた。演説の記録については字句の整理をおこなった。なお、読者各位の理解に資するため、解題と注釈を加えることとし、解題は本文の標題のあとにおき、注釈は巻末にかかげた。

中共中央文献編集委員会

一九八〇年六月二十四日

本訳書は、北京人民出版社一九八〇年十二月出版の「周恩来選集」上巻の完訳である。各論文の解題と巻末の原注もこの版から訳出したものである。

注釈は原注と訳注に分け、原注は漢数字を「」でかこみ、巻末においた。訳注は訳者が加えたもので、算用数字を○でかこみ、原注のあとにおいた。また、注釈の末尾に本文のページ数を示した。

目次

当面の政治闘争とわれら（一九二六年十二月十一日）	1
迅速に出兵して蒋介石を討伐しよう（一九二七年四月）	9
党内のすべての非プロレタリア意識を断固一掃しよう（一九二八年十一月十一日）	13
湖南・湖北西部ソビエト区の発展についてのいくつかの問題 （一九二九年三月十七日）	21
白色テロのもとで党の組織工作をいかに健全化するか（一九二九年三月二十五日）	29
彭湃、楊殷、顔昌頤、邢士貞ら四同志の逮捕・虐殺の経過（一九二九年九月十四日）	35
赤軍第四軍前敵委員会への中共中央の指示書簡（一九二九年九月二十八日）	43
当面の軍閥混戦の情勢	43
赤軍の根本任務とその前途	49
赤軍の発展方向とその戦略	50
赤軍と大衆	53

赤軍の組織と訓練	56
赤軍の給養と經濟問題	59
赤軍内部の党活動	60
赤軍の当面の行動	63
トロツキー反対派 その中国における發生の原因と展望 (一九二九年十月)	65
武漢における活動の問題について (一九三〇年九月四日)	71
李立三路線の理論的基礎 (一九三〇年十二月一日)	81
四回目の「包圍討伐」粉碎についての電報 (一九三三年一月〜三月)	87
一 一月二十七日付の電報	88
二 一月三十日付の電報	91
三 二月七日付の電報	93
四 二月十三日付の電報	95
五 二月十五日付の電報	97
六 三月二日付の電報	98
七 三月四日付の電報	99

八	三月十六日付の電報	100
九	三月二十日付の電報	101
	西安事變にかんする三通の電報（一九三六年十二月）	105
一	宋子文との交渉状況（一九三六年十二月二十三日）	106
二	宋子文、宋美齡との交渉結果（一九三六年十二月二十五日）	108
三	西安事變の平和的解決後の情勢とわれわれの方針（一九三六年十二月二十九日）	110
	国共合作の公表についての中共中央の宣言（一九三七年七月十五日）	115
	妥協して和を求めることに反対し、華北の抗戦を堅持する	
	（一九三七年十一月十三日）	119
	抗戦の当面の危機と華北における抗戦堅持の任務（一九三七年十一月十六日）	123
一	抗戦の当面の情勢とその危機	123
二	華北で抗戦を堅持する可能性とその展望	127
三	華北の抗戦を堅持するうえでわれわれの任務	131
	現段階における青年運動の性質と任務（一九三七年十二月三十一日）	135
	こんにちの青年運動の性質	135

こんにちの青年運動の任務	137
抗戦の軍隊における政治工作（一九三八年一月十日）	141
一 革命的政治工作は民族革命の生命線である	141
二 抗戦の軍隊における政治工作の任務と内容	145
三 政治工作の組織と方法	151
当面の情勢と新四軍の任務（一九三九年三月）	153
一 当面の情勢と新四軍の環境	153
二 新四軍の発展および困難の克服	155
三 新四軍の戦略、方針および任務	159
確固とした戦闘的な西南地方の党組織を建設しよう（一九四二年一月）	165
一九二四年から二六年までのわが党と国民党の関係について（一九四三年春）	169
わたしの修養要則（一九四三年三月十八日）	187
コットニス医師の遺族にたいする弔問の手紙（一九四三年三月二十二日）	189
りっぱな指導者になるには（一九四三年四月二十二日）	191
延安の歓迎会における演説（一九四三年八月二日）	199

中国のファシズム——新専制主義について（一九四三年八月十六日）	213
一 問題の提起とその回答	213
二 中国ファシズムの思想体系	217
三 中国ファシズムの歴史的根源	225
四 中国ファシズムの政治綱領と戦術	228
五 中国ファシズムの組織と活動	232
党の「第六回大会」についての研究（一九四四年三月三、四日）	235
一 中国革命の性質、任務、前途	236
二 中国革命の原動力と階級関係	244
三 大革命の経験と教訓	251
四 革命の情勢と党の戦術	262
五 党の諸政策	269
六 「第六回大会」とその影響	274
大後方における文化人の整風の問題についての意見（一九四五年一月十八日）	281
統一戦線について（一九四五年四月三十日）	283

一	抗日民族統一戦線の問題について	283
二	統一戦線の経験と教訓の諸問題について	308
	当面の緊急要求（一九四五年八月）	329
	内戦反対・独裁反対を積極的に宣伝し、蒋介石の欺瞞的たくらみを暴露しよう （一九四五年八月十六日）	331
	鄒韜奮の夫人沈粹瀾にあてた慰問の手紙（一九四五年九月十二日）	333
	国民党二中全会についての談話（一九四六年三月十八日）	335
	「四・八」烈士は永遠に不滅である（一九四六年四月十九日）	345
	内戦の拡大と政治的暗殺に反対する厳正な声明（一九四六年七月十七日）	351
	進歩的友人にもっと配慮を（一九四六年七月二十五日）	353
	李公樸、聞一多追悼の辞（一九四六年十月四日）	355
	上海の魯迅逝去十周年記念集会における演説（一九四六年十月十九日）	357
	国民党の「国民大会」招集にたいする強硬声明（一九四六年十一月十六日）	359
	朱徳総司令の還暦を祝うことば（一九四六年十一月三十日）	365
	延安各界が挙行した「双十二」記念会での講演（一九四六年十二月十二日）	369

一年來の交渉とその展望（一九四六年十二月十八日）	375
一 一年來の交渉の状況	375
二 一年來の交渉の経験・教訓と將來の展望	390
マーシャルの中國退去聲明について（一九四七年一月十日）	393
蔣介石支配区における活動方針と鬭争戦術にかんする二つの文書	
（一九四七年二月二十八日、五月五日）	403
全国的な大反攻をくりひろげて、蔣介石を打倒しよう（一九四七年九月二十八日）	409
當面の民主政党政工作についての意見（一九四八年一月）	427
指導作風についての重要問題（一九四八年二月五日）	433
旧解放区、準旧解放区の土地改革と整党活動（一九四八年二月二十二日）	435
土地改革と整党問題について阜平中央局にあてた電報（一九四八年二月二十三日）	449
党の政策はいちはやく大衆に公表しなければならぬ（一九四八年三月七日）	455
部隊に兵士委員会を試験的に組織しよう（一九四八年三月八日）	457
新民主主義の經濟建設（一九四八年六月二十一日）	461
敵のにせ和平運動の陰謀をうち破ろう（一九四八年七月二十七日）	465

	蔣介石支配区の鬭争には冷静な頭脳と柔軟な戦術が必要である	
	(一九四八年八月二十二日)	469
	鄭洞国への書簡 (一九四八年十月十八日)	473
	和平交渉問題についての報告 (一九四九年四月十七日)	475
	広範な人民大衆を結集して、ともに前進しよう (一九四九年四月二十二日)	493
	毛沢東に学ぼう (一九四九年五月七日)	501
	中華全国文学・芸術活動家代表大会における政治報告 (一九四九年七月六日)	521
	一 三年にわたる人民解放戦争の勝利	522
	二 文芸面のいくつかの問題	530
	生産を回復し、中国を建設しよう (一九四九年七月二十三日)	541
	『中国人民政治協商会議共同綱領』草案の特徴 (一九四九年九月二十二日)	551
原	注	559
訳	注	675

当面の政治闘争とわれら

(一九二六年十二月十一日)

一九二六年の冬、北伐戦争が着々と勝利をおさめ、労働者、農民の大衆運動がますますい発展をみせると、国民党の右派勢力は反革命活動に拍車をかけ、国共合作と労農運動に反対するキャンペーンをまきおこした。陳独秀に代表される中国共産党党内の右翼日和見主義者は、この反動的潮流に度肝をぬかれて、プロレタリアートの指導権を堅持する勇気を失い、国民党右派にたいし迎合と譲歩をくりかえすようになった。この文章は、このような背景のもとで執筆され、中共広東・広西区委員会の機関誌「人民週刊」第三十七号に発表されたものである。

一

われわれが確認し、また確信もしているように、当面の政治闘争は半封建勢力(一)を打倒するための闘争であり、民主政治を実現するための闘争である。そこで、一部の人たちはこんな疑問をもつようになった——当面の革命活動に差異がないのなら、なぜ国民党(二)のほかに共産党が存在し活動しているのか、共産党が存在し活動するかぎり、国民党とのあいだには衝突や分裂が

起るにきまつてゐる、と。

もともと、この問題を説明するため、ここ三年らい、多くのことが書かれたり話されたりしてきた。われわれとしては、当面の政治闘争がいっそう有意義におこなわれ、革命者がいちだんと団結し、理解を深めあうよう、ここにあらためて回答しておきたい。

(一) 国民革命は、もともと、中国の被抑圧諸階級にとって共通の活路である。だが、この革命の過程で、各階級にはそれぞれの出発点がある。とくに民主政治の実施過程では、それぞれの獲得しようとする利益になおさら違いがある。各階級の利害が異なる以上、もつともひどい抑圧を受けている労働階級がもつばらその階級の利益のために闘う前衛としての共産党を必要とするのは、言うまでもない。共産党が労働階級のために闘い、かれらを導いて国民革命に参加させるということ——これは決して国民党が各階級を指導して国民革命に力をつくす妨げにはならず、むしろ実際活動では互いに補い、助けあうのに役立つはずである。

(二) 被抑圧諸階級の共通の目的は国民革命であるが、長期にわたる革命闘争の過程で、民族ブルジョアジー①がつねに妥協性をおび、小ブルジョアジーもよく動揺するのにひきかえ、プロレタリアートだけではもつとも非妥協的な革命的階級である。民族解放と民主政治の実現という国民革命の真の目的を達成するためには、プロレタリアートが農民、手工業労働者と提携し、小ブルジョアジー、民族ブルジョアジーを促して、妥協することなく敵と闘わなければならない。したがって、労働階級のために闘う共産党の活動は、ほかでもなく、労働大衆の革命的諸勢力を指

導して国民革命をおしすすめ、他の階級の妥協性が革命に悪影響をおよぼすのを防ぐ点にあるという事、これは当然である。このような活動は、国民党の革命的要素をいっそう充実したものにするので、国民革命を指導する国民党にとって有利でこそあれ、国民党との衝突や分裂の危険をもたらしものでは決してない。それというのも、もしも衝突が起これるとすれば、それは革命的な労農大衆とその敵帝国主義に妥協するブルジョアジーとの衝突にほかならず、もしも分裂が起これるとすれば、それは革命的な国民党左派および共産主義者と非革命的な右派分子との分裂にほかならないからである。国民党は革命的であり、国民革命を指導する立場に立っているから、このような衝突や分裂を恐れる必要はないはずである。そのうえ、事実が立証しているように、五・三〇運動〔言〕いらい、革命的労農大衆、とくにプロレタリアートは、その反帝精神とストライキ戦術を堅持して、イギリス帝国主義に妥協するブルジョアジーとつねに衝突してきた。また、廖仲愷暗殺事件〔四〕が発生してのち、国民党左派と共産派は一致して、この事件の関係者や反共・反ソ・反労農運動の一味と闘い、革命を望まない多くの者とたもとを分かってきた。その結果は、国民革命と国民党にとってなんらの損失もなかったばかりでなく、革命勢力がますます団結することとなった。こうしてはじめて、国民革命は今日のように発展したわけである。

二

われわれの説明は以上のとおりであるが、われわれの態度についても、より具体的に表明して